



25歳ゲーマーが乳 がんになりました

さくら

『ゲーマーな私が癌になりました』

私は世界一運のいい癌患者である。今でもそう思っています。

私の癌が発覚したのは二〇一二年の冬、二十五歳の時でした。

左胸の下にある黒い影とチクチクした痛み。それが気になってとりあえず近くの婦人科に行ったのが始まりでした。

婦人科で乳腺クリニックを紹介され、マンモグラフィーとマンモトーム検診を経て左胸の乳癌が発覚。最初に病院に行ってから一ヶ月も経たない出来事でした。

なぜ私が運のいい癌患者なのか。

それは最初に病院に行ったきっかけの黒い影と痛みは癌と関係ないものだったからです。

よく乳癌と間違えて病院に行くきっかけになる乳腺炎。それが影と痛みの正体だったのです。

癌はそのしこりの奥、普通なら見つからない深部に潜んでいました。

定期的に検診をしない限り見つからない場所だったのです。

癌発覚後、私は市にある大きな大学病院で癌治療を行う事になりました。

そこでの検診の結果、大きさはそこそこあっても私の癌は脇にすら転移がしていないステージの軽いものだとわかったのです。

でも私は左胸に影ができてなければ病院に行く事すらなかったでしょう。

そうしたら、若い私の体は癌を物凄い勢いで進行させ、手の付けられない状態になっていたかもしれません。

癌にとって早期発見は何よりの幸せ。私は本当に運が良かったのです。

自分の運の良さを感じるようになったのは私をとりまく環境にもありました。

仕事を点々としていた私が当時務めていたのは、斎場の受付をする会社でした。

もともと上司の方々は優しい人ばかりでしたが、私の癌を知り親身になってくれました。

治療を始めると伝えた時も、籍を残して舞ってくれるとすぐ言ってくれたのが凄く嬉しかったです。

仕事も軌道に乗ってきてしばらく働けないのは残念でしたが、上司と同僚が優しい気持ちで待っていていたおかげで安心して治療に専念できたのだと思います。

当時私には付き合っている男性、G君がいました。

二十二歳の時に付きあって、癌が発覚した頃にはもう四年以上の付き合いになっていました。

最初こそ励ましてくれていた彼でしたが、癌が明るみになって以来本当に私の事を心配してくれていました。

もちろん治療も辛かったのですが、一番精神的にきつかったのは、マンモトーム検診をしてから結果が出るまでの間だったような気がします。

自分は癌なのかそうではないのか。もし癌だったらもう手の施しようがないのではないか。癌に対する不安が強くて、私の精神は安定しない状態が続きました。

そんな中彼の家に遊びに行くと、G君はパソコンを開きとあるページを見せてくれました。それは癌を克服した人達の集まる発言小町でした。

ドラマや漫画の世界だと若い癌患者の扱いは酷くて、手遅れで亡くなってしまうパターンがお決まりでした。

でも世の中には、癌を治して元気に過ごしている人がこんなにもたくさんいるのだとその発言小町は教えてくれました。

正式に乳癌が発覚した時のG君の第一声は、

「一緒に頑張ろう」

でした。彼はずっと一緒に戦っていこうと告げてくれたのです。

私が闘病している際G君も忙しい時期で、後々闘病中にあまり構えなかった事を悔やんでいる時期があったと知りました。

しかし私は、会えない時期が続いていても常にG君と戦っている気分でした。

一人ぼっちじゃない。それは闘病患者にとって何より一番の励みになる気がします。

私の闘病は抗癌剤から始まりました。

まだ小さな癌とはいえ浸透性。もしかしたら血液中に癌が広がって今後転移してしまうかもしれない。

二十代の癌患者は全て抗癌剤を行うそうですが、私もそれに則って行う事になりました。

三週間に一回、合計八回の約半年間の戦いです。

まず最初の投与は入院して始めました。

入院初日こそ元気だったものの、次の日のお昼に抗癌剤を入れてから現実を思い知りました。

今の薬は本当に進歩していて、抗癌剤を入れた半年間で私は一度も吐く事はありませんでした。全ては抗癌剤の前に入れる吐き気止めの点滴のおかげです。

それでも吐き気全てを抑えられるわけではなく、抗癌剤を入れて約一週間は気持ち悪くて寝たきりの状態でした。

最初の抗癌剤の時は様子見のため入院するのですが、病院の味気ないご飯が口の中でジャリジャリしているような気がして、まったく食べ物を口にする事がなかったです。

退院して数日後、随分吐き気が改善されてから食べたハンバーガーがとても美味しかったのを覚えています。食事というものはこんなに素晴らしいものなのか、と再確認できました。

癌の治療といえば入院しっぱなしのイメージがあるようですが、私は最初の五日間だけ入院して、あとは自宅療養と外来での抗癌剤投与でした。

一回入れて次が投与されるまでの三週間、一週間は気持ち悪さで倒れていましたが残りの二週間は体調も改善して出かける事が多かったです。

私はゲームをするのが大好きなんです、一番好きなゲームがゲーセンにあるビートマニアという音楽ゲームでした。

なので煙草臭くない静かなゲーセンに行って気晴らしに遊ぶのも、闘病中の安らぎの一つでした。

ゲームをしている間は体調が悪くても抗癌剤の辛さ、癌である自分の大変さを忘れられたからです。

それでも抗癌剤のせいで体力が落ちてしまったので長居はできませんでしたが。

私はネット（ツイッター）を通じて音楽ゲーム繋がりの友達がありました。

私が治療をしている間、何人もの友達が遠くから地元まで遊びに来てくれました。

私が長い間電車に乗れず、しかも田舎に住んでいたのが都会の友達と遊ぶのは治療中できないんじゃないかと思っていましたが、皆私のためにわざわざ遊びに来てくれたのです。

ただでさえ闘病は大変なのに病気の名前は乳癌。しかも自分と同年代の友達がなっているという事で、周りには本当に心配をかけていたんだなぁと後から気付かされました。

二十代で癌になるなんて、周りの中ではドラマの世界のようだと感じていたでしょう。私も実

際そうでした。

だから友達も元気に外に出ている私の姿を見てとても驚いた方が多かったそうです。やはりずっと寝たきりというイメージが強かったのでしょう。

沢山の友達が私に会いに来てくれた事は、闘病中の大いな励みになりました。今でも友達の方々には本当に感謝しています。

友達の事を書きましたが、私には一生忘れる事のできない友人が一人います。

三回目の抗癌剤を目前にしたある日の朝、仲のいい友人から携帯にメールが届きました。それは共通の友人であるとある男性が亡くなったというものでした。

自殺でした。遺書もなくビルからの飛び降り、今となっても彼が死を決意した理由は明かされていません。

週末に葬儀がありましたが、私はその週にどうしても薬を投与しないといけなかったので行く事ができなかったのです。

その時まで私は癌になったのを仕方のない事と考えていました。皆いづれなる病気が早めに来てしまっただけと。

でもこの時は自分が病気であることを悔やみました。ただでさえ突然の別れだったのに、さよならの言葉も伝える事ができないなんて。

投与の日を遅らせるのも考えました。しかし親から反対を受けたし周りも止めてくれました。

その友達に最後に会ったのは抗癌剤を始める直前、十人ほどの友達と飲みに行った時でした。

彼も私の病気を心配していて、ネットで告白した際は、

「元気な姿を早く見せておくれー」

と書き込んでいてくれました。

飲みの際席が離れていて沢山話せなかった。元気な姿を見せてあげられなかった。私には彼に対していっぱい後悔が残っています。

もちろん周りの憔悴も大きくて、それを見ていた私は、

「自分は元気な姿を見せてあげなきゃ」

と感じるようにもなっていました。

彼にお別れができなかったのは本当に残念だったけど、いつも彼に天国から見守られている。そう思いながら闘病を続ける決意を固めました。

抗癌剤と聞いて吐き気の次に思いつくものと言えば脱毛でしょう。

投与前にウィッグは用意していましたが、実際髪の毛が抜け始めたのは投与してから一ヶ月弱経ってからと随分日が空いていました。

当時の私は、ちょっと髪の毛が抜ける度にビクビクしていました。いつになったらごっそり抜ける日が来るのか怖かったし、抜けるなら早く抜けて気持ちを楽しみたかったのです。

偶然にも最初の投与から二週間後、私の二十六歳の誕生日でした。

両親と妹二人がケーキを買ってきてお祝いしてくれました。すごく気を使っててくれて、きっ

と家でモヤモヤしている私の気持ちを察していたのでしょう。

家族やG君、友達に祝われたのはとても嬉しかったのですが、薬のせいで浮腫みはじめた顔と、いつ抜けるかビクビクしてる髪の毛を鏡で見る度落ち込む日々でした。

そしてごっそりと髪の毛が抜けた日。

シャワーを浴びていて頭を洗っていると、手に髪の毛がごっそりとくっついていました。

私は軽くパニック状態になって、ひたすら頭をいじって髪の毛を抜きはじめました。手は何度も真っ黒になって、排水口はすぐ詰まってしまいました。

癌を告知され、抗癌剤を入れた時も泣かなかった私でしたが、髪の毛が抜けたのを見た時初めてたくさん泣きました。

何で私がこんな目に合わなきゃいけないのか。薬で顔が浮腫み髪の毛もボロボロ。しかもホルモン剤で生理が止まってしまった。こんな自分は女として生きていく価値があるのだろうか。まだまだおしゃれだっけしたかったのに。

人前で泣くのが得意ではない私は、辛かった時はいつもお風呂場で泣いていました。

それでも抜けていく髪の毛を見てくのは、家族が一番辛かったでしょう。

私は鏡を見なければいい話ですが、家族は家にいる以上ウィッグもつけてない私の頭を見ていないといけないのですから。

私の髪が抜け頭にボコボコと禿げてる所ができていく頃、父親は私の目を見つめてくれませんでした。きっと自分の娘の見た目が急激に変わっていく事を受け入れられなかったのでしょう。

でもその頃の私はようやく髪が抜けてくれてホッとしたのもありました。これで外歩いていていつ毛が抜けないか気にしなくていいし、あとはなくなっていく一方なのだから。

だんだんと家族も見慣れてくれたようで、ほとんど抜けきった頃には、

「お坊さんみたい！」

「死んだお祖父ちゃんがこんな髪型だったねえ」

と、頭の事をいじる発言も出せるようになっていました。

今までショートカットだった私は、ウィッグをつけて初めてロングの髪型を体験する事になりました。

どうしてもウィッグと周りに気づかれたくなくて帽子をかぶり始めたのですが、そこから帽子を買うのが楽しくなったり、ショートの頃にはできなかった髪型を試みたりなどと楽しむ事も増えていったのです。

父が買ってくれた帽子は今でも宝物です。ウィッグを外した坊主頭でも後ろ側がすっぽり隠れる特注品でした。

それでも、髪が手にこびりついたあの瞬間は一生忘れる事のない辛い経験だったのは間違いありません。

癌告知から闘病が終わるまで、私はちょこちょこ同じく癌で戦う闘病のブログを読んでいま

した。

その中で多かった発言が、癌を克服して病気になった事を感謝するという言葉でした。

私は心が狭いので、残念ながら今まで癌になってよかったなんて一度も思った事ありません。でも癌になって気付かされた事はたくさんあります。

一番は自分を好きでいてくださる方の大切さです。家族、G君、友達。みんな私に優しくしてくれました。

静かな食事場所を紹介してくれ奢ってくれて「元気になってお返しして」と笑ってくれた友達。家にこもりっきりになって塞いでた私に何度も連絡を取ってくれたみんな。本当に感謝しきれません。

抗癌剤で体がだるくなった時は、自由にお出かけできて遊べるみんなの事を恨んだ時もありました。

それでもみんなの優しさに触れる度、病気になった事で素敵な気持ちに気づけてよかったと感じるのです。

闘病中は体調不良との戦いでしたが、その中で一つ幸せな出来事が私にやってきました。

抗癌剤の合間でG君ととあるゲーセンへ出かけた日の事です。

私は椅子に座っていました。すると目の前を横切った男性が、どこかで見た事ある顔だなあと気づきました。

その男性が止まった時、私は息が止まるかと思いました。大好きなアーティストさんだったのです。

私のやっているゲームは音楽ゲームなので楽曲を作るコンポーザーが何人かいるのですが、目の前にいるのは私が一番大好きで、今まで何枚もCDを買っている方だったのです。

緊張で声が震えながらも、私はコンポーザーさんRさんに「Rさんですか？」と話しかけてみました。すると満面の笑顔で「そうですよ」との返事が。やはりRさんだったのです。

Rさんは色んな所で活躍されている場なので、会う機会はイベントに行ったりしないと作れないし、大勢の人がいるからほとんど話す事はできません。

しかし偶然なのか、ゲーセンにいる人はまだRさんの存在に気づいていなく、私とRさんが対面で話すというありえない展開になっていたのです。

私はRさんに、Rさんの楽曲もゲームも大好きですと伝え、近くにあったメモ帳にサインを書いてもらいました。

Rさんはとても気さくな人でサインもにこやかに応じてくれて、一度離れたのにもう一度私の名前を書いてもらうため声をかけた時も嫌な顔一つせず「さくらちゃんへ」と書いてくれました。

その後Rさんのお友達の方が集まると周りの人も気づき始め、彼らが音楽ゲームをしている時はたくさんの方が取り囲んでいました。

Rさんは十分ぐらいでゲーセンを去ってしまいました。どうやら待ち合わせをしていたついでにゲームの状況を見に来ていたようです。

この日私はG君と出かけるか出かけないか迷っていて、しかも偶然このゲーセンに立ち寄っただけでした。

それなのに大好きなゲームの、一番大好きな楽曲を作るRさんに会えてサインと握手をもらえるなんて、本当に夢の様な出来事でした。

この出来事は、私の治療への一番の励みになったと思っています。神様がくれたプレゼントだと。

吐き気を抱えながらも、私は知り合いと沢山のご飯を食べに行きました。

体力のなくなった私にとっては、無闇に人の多い所へ行くより食事をしてゆっくりする空間が楽しめたからです。

もともとラーメンが大好きな私は、G君と一緒に色んな土地のラーメンを食べに行ったりしていました。

抗癌剤の影響か油っぽい物を取るとお腹を壊すようになっていましたが、気晴らしの為にも積極的に食事に出かけました。

しかし抗癌剤の間はお腹を下しやすくなるので生物は禁止されていました。

しょっちゅうお寿司やお刺身を食べている訳じゃなかったけど、いざ食べれないとなると欲が強くなって私は生魚を求めています。

半年間回転寿司を我慢するのは辛かったです。なぜなら家の近くに回転寿司屋があって家族とよく行ったからです。

私には妹が二人いるのですが、投与の間家の食生活を私に合わせたものにしてしまったので、いつも申し訳ないと感じていました。

ただでさえ薬で体が弱っているのに風邪を持ってきては大変だ、という事で家族はすごく神経を使っていたようです。特に終わりにかけてはインフルエンザとノロウイルスが流行っていたので、絶対誰もかからないようにと徹底していました。

そんなに会話もしないし仲がいいとは言えない妹二人でしたが、さすがに姉が癌となったら色々気遣ってくれました。寝込んでる私の様子を見に来てくれたり、出かけられない私にお土産のお菓子を買ってきてくれたりしました。

妹たちにとっては、もしかしたら友達や彼氏、そして親以上に姉が癌になったというのが衝撃だったのかもしれませんが。二十代の癌患者がこんなに身近にいるという事実と、妹である自分に因子があるのではないかと。

実際、妹の一人には子宮系の病気が気になるから病院に行くべきだろうかと相談された事もあります。

抗癌剤が六回目に差し掛かった頃には、私は次の投与の日が待ち遠しくなっていました。

半分を過ぎると「もう残り半分以下なんだ！」と考えられるようになり、前向きな気持ちになっていました。

私の場合二種類の抗癌剤を四回ずつやるという方法を取ったのですが、後半行った抗癌剤が比較的体に負担がかからなかったのも影響しているかもしれません。

おじいちゃんおばあちゃんしかいない化学療法室は、とても静かで綺麗だったけど居心地の悪い場所でした。

やはり同年代で癌を戦っている人が身近にいなかったのは寂しかったです。そもそも病院がご

老人の方ばかりでしたから。

この頃私は、若年性癌と戦っている人達の団体を見つけ加入しました。

冊子を読むと大きな衝撃を受けました。世の中にはこんなに若いうちから大病と向き合っている人が多いのだと。

自分より何十倍も辛い治療を終えた方が笑顔で対談している話を見て勇気づけられました。

いつか自分も闘病を終えて笑顔になりたい。その思いが次の抗癌剤投与に向けての活力となっていました。

実際私の周りにも癌になった方々がいて、その多くは治療を終え元の生活に戻っている人達です。

その方々は私の病気を知ると、いてもたってもいられず父や母にメールをしたそうです。

多くは四十代で発症している方だったので、同じ癌でしかも二十代でなった私の気持ちがよくわかったのでしょう。四十代でも癌になったら若いと言われるでしょうから。

皆様私にとっても素晴らしいアドバイスや励ましをしていただいて、いつか私も闘病を終えたら、新たに闘病を始める方を励ませる立場になりたいと思うようになっていました。

治療の後半になると気が少し楽になりますが、やはり始めたばかりの頃が一番先が長く感じるし終わりが見えなくて絶望が強いと思っています。

早く自分も励ませる立場になりたい。その思いは治療が進めば進む程強くなりました。

そして八回目の日。約一時間半の投与を終え全八回の抗癌剤が終了しました。

抗癌剤を終えて達成感に浸る間もなく、新年早々私は入院する事になりました。摘出手術をするためです。

治療の予定だと抗癌剤で癌を小さくして一部だけ取る手術にする予定でしたが、癌が奥にある事と念には念をいれて左胸を全摘出する事になりました。

全摘は胸の形が変になってしまうので避けたかったのですが、やはり再発が一番怖かったです。全摘の手術を了承しました。

入院期間は約十日。少ないように見えますが、今は癌患者が増えすぎて余程の事が無い限り長い間入院させてくれないそうです。

入院当日の夕方、G君とその親友がお見舞いに駆けつけてくれました。

ベッドで二人を待っていると、現れたのは大量の影。両親とG君達と一緒にやってきたのです。

実は両親とG君を会わせたのは四年以上付き合っていてこれが初めてでした。皆は賑やかに会話していましたが、私は少し緊張していたのを覚えています。

G君は病院まで片道二時間かかりますが、初日と手術直後の二回、面会時間ぎりぎりまで側にいてくれました。彼もやはり手術の内容とそれに怯える私が心配だったのでしょう。

手術前後とその後の十日間、ほぼ毎日入れ替わりで友達がお見舞いに来てくれました

手術前日には一番仲のいい女性二人が来てくれて、沢山のお菓子と手紙を持ってきてくれました。

手紙なんて、別にこれから戦に行くわけじゃないんだから……とビックリした部分もありましたが、手術と聞けばやはり怖いものだし、生死を賭けた戦いと捉えられたのでしょう。

二人の手紙には半年の抗癌剤への劳いの言葉と、次の日の手術に向けての励ましがありました。

入院中何もする事がない私は、ひたすらツイッターを見ていてたまに愚痴をこぼしていました。

それに友達から励ましの言葉が返ってきて、その度に喜び元気づけられていました。

私の中では手術は一つの通過点という認識でしたが、周りは本当に大変で怖い事と認識していたようです。

落ち着いていた私ですが、いざ手術の直前となるととても動揺してしまいました。

両親と一緒に手術室まで行き、二人と別れ一人で手術室の中に入った時、猛烈な孤独と恐怖感を味わったのを覚えています。

今まで一人で戦ってきたわけではないけれど、いざ癌と向き合うのは自分しかいないんだ。そう思うと体にメスをいれる事がとても怖くなってしまったのです。

手術室の中で私は泣いてしまいました。手術をする先生、麻酔医、かかりつけの先生みんなが私を囲んで慰めてくれました。あまりにも沢山の人が励ますから可笑しい気持ちになって泣き止んだ私でした。

呼吸器から麻酔を入れられ、手術は寝ている間にすぐ終わってしまいました。

左胸は全摘され、生理食塩水のパックを詰め込まれたとはいえ胸の形は完全に崩れてしまい、術後数日後に鏡で自分の裸を見た時複雑な気持ちになってしまいました。

確かに癌は取り除かれたけど、私は大きな物を失ってしまったのではないか。半年後にもう一度手術してシリコンを入れれば大分元の形に戻るけど、あの自然な形は一生帰ってこない。

泣いたわけではないけれど、この時私は健康体を手に入れるために沢山の物を失ってしまったのだ、と喪失感に襲われたのです。

でもその喪失感を埋めてくれたのは、やはり私を取り囲む周りの方々でした。

ほぼ毎日母親がお見舞いに来てくれて、何もする事がなくて塞ぎこんでた入院中の私の長いおしゃべりをいつも聞いてくれました。

G君は私の胸の形が可笑しくなっても気にしないと言ってくれました。服を着ちゃえば気にならない、皆気づかないよと。

手術後お見舞いに来た友達は、全て私の今までの闘病を褒めてくれました。本当に頑張った、偉い、お疲れ様。

入院が新年の話だったのですが、とある友達が大晦日行った明治神宮でお守りを買ってきてく

れていたのは驚きました。桐箱に入った病氣平癒守は私の大切な宝物の一つです。

手術から1週間後、無事私は退院しホルモン治療以外の治療を終わらせる事ができました。

癌が発覚したのが四月で治療が終わったのが次の一月。約十ヶ月の闘病生活でした。

それでも初期で見つかり転移がなかったから一年もかからずに治療が終えられたのだと思います。もしあと半年でも発見が遅れていたら、どこかに転移していたのかもしれませんが。

夏にまた胸にシリコンを入れるための手術が残っていますが、苦しい闘病は終了しました。

喉元すぎれば熱さ忘れるといいますが、二十六年間生きてきた中で一番苦しい十ヶ月間だったのは間違いないです。

私は二十二歳の時発達障害だと診断され、障害者手帳と自立支援を申請した身でした。

この事は家族とG君、友達の半分ぐらいの方が知っています。

なので知っている方は、私が障害と癌で二重の苦しみを味わっているのではないと心配していたようです。

私の中では発達障害の診断を受けた時も相当苦しみましたが、生死がかかっている乳癌の宣告の方が何倍も辛かったです。

どちらも幸いしたのは重い症状ではないという事でしょう。新しく出会った方々に発達障害もウィッグも気づかれた事はありません。

闘病を終えて、私はゲーセン通いを再開しました。

ビートマニアというゲームは継続してやっていないと上手くならないので、闘病終了直後やった時はあまりの腕の落ちように沈んだ事もあります。

でも闘病を終えて気づいた事があります。

ゲーム、趣味、仕事、恋愛、友達関係。他にも色々ありますが、生死を賭けた悩みを続けていた私にはそれらで悩める人生がどれだけ幸せかという事に。

特に趣味においては自分のせいで上手くいかなくて悩み苦しむ人も多いですが、趣味で悩めるという事は他に悩む要素がなくて幸せだという証なのです。

だから私もまたゲームを頑張りました。ゲームが大好きだから上手くなりたい。ゲームで悩めるのは幸せなんだ、と。

おかげで趣味に対して前向きな気持ちで望めるようになった気がします。これは闘病を乗り越えたおかげかもしれません。

先程書いた「癌になってよかった」と発言する闘病者の気持ちはまだ私にはわかりません。やはり癌にはなりたくなかったです。

でももし今の周りの人達に囲まれて癌になった人生と、癌になってないけど人が集まらない人生だったら迷わず前者を選ぶでしょう。

それだけ私は沢山の優しい人に囲まれた、運のいい幸せな人間なのでから。